



ようこそ、「水辺の森」へ。

春日部市内には、私たちの目に触れることのない巨大河川が存在する。平成18年に完成した治水のための地下水路「首都圏外郭放水路」がそれだ。放水路の上には、約1.5ヘクタールに及ぶ「水辺の森」が広がっていて、自然と向き合い、自然から学ぶ観察会が年数回開かれている。

市民が植えた小さな苗木が
今は豊かな森になっている



水辺の丘運営協議会構成員
もろずみ みのる
両角 實さん

市内の中小河川が台風などで増水したときに、その水を地下に取り込み、江戸川へ流すために作られた首都圏外郭放水路。全長6・3キロの巨大地下水路だ。そのコントロールセンター「庄和排水機場・龍Q館」の周辺は、さまざまな樹木が鬱蒼と茂る「水辺の森」と呼ばれる緑地になっている。

実は、「水辺の森」は、広大な人工の森である。約10年前までは、何もない丘の斜面だったが、平成18年から19年にかけて、そこに、市民の手で約2万6千本の苗木が植えられた。それが、この豊かな森のルーツだ。

こんな身近に人の手を
加えない自然の森がある

10年前に植樹に参加したことをきっかけに、水辺の森の保全活動に関わる両角實さん（水辺の丘運営協議



水辺の丘運営協議会は、外郭放水路が地域の新たな文化と人々の交流の場となることを目的に結成された組織で、国土交通省、春日部市、市民団体G-CANSの三者で構成されている。協議会・G-CANS会長の錦織晴雄さん（写真）のあいさつから観察会はスタート！

緑地の一角には農業用水路（右写真）が流れているため、水辺に生息する動植物の姿も多く観察できる。自然観察会は事前申し込み不要、参加費無料。開催日時は、市の広報などで掲載予定。



会、市民団体G-CANS（メンバー）は、森の成長を見守ってきた一人だ。「この森は、生態学者の宮脇昭先生が提唱する宮脇方式という植樹法で作られました。それは、その土地本来の気候風土に適した植生を調査し、その土地に合う多くの樹種の苗木を植えるというものです。水辺の森は、25種類の苗木が植えられています。自然淘汰によって枯れてしまう木もありますが、できるだけ人の手を加えずにいると、自然の力が森を育んでくれるんです。まさに、本来その場所にあるべき「自然の森」になっていくんです」と両角さん。「さらに樹木が成長するにつれて、もともとその土地に生息していた多種多様な生物も姿を見せるようになってきます」

この日の観察会は、まだ初夏とあってカブトムシやクワガタは見られなかったが、蝶やバッタ、テントウムシなどの小さな昆虫を発見するたびに歓声があがっていた。

足元の小さな自然から
学ぶこともたくさんある

自然観察会は、埼玉県生態系保護協会春日部支部のメンバーも講師役

で参加している。動植物の名前や生態だけでなく、自然と人間との共生の大切さなど、生態系や環境についての深い話が聞けるのも、この観察会ならではの魅力だ。同支部長の三好あき子さんは、「生き物の名前を知ることでも大切ですが、観察すると、花が虫を呼ぶための工夫や、虫が天敵に見つからないようにしている様など、いろいろなことが分かります。足元の小さな自然からも発見はたくさんあります」と語る。

自然とふれあうには遠くの山や川にわざわざ出かけなければならないと考えがちである。しかし、道ばたでも、また、「水辺の森」のように、少し足を延ばすだけで、自然とふれあえる場所がたくさんある。

「観察会をきっかけに、身近な自然にふれ、自然の豊かさ大切に気づいてくれるとうれしいですね」

両角さんたちは、自分たちが植樹し、自然の力が育んだ水辺の豊かな森で、虫捕り網を手に、目を細めてほほ笑んだ。

「さわってみる」
ことが大事
なんだって！



お父さんと一緒にはじめて観察会に参加した武藤有嬉さん（緑小学校3年）。ふだんから昆虫の生態に興味があり、自宅ではカブトムシの幼虫を飼育中だとか。「今日はいろんな昆虫が見られてすごく楽しかった。また参加したいなあ……」

観察会の講師を務める埼玉県生態系保護協会春日部支部長の三好あき子さん。市と協力しながら、小学生の環境学習も行っている。「子どものうちから身近な環境問題に関心を持つことはとても大切なことです」

